

特別講演 「肝の炎症性疾患の病理：肝肉芽腫を中心に」

中沼 安二 先生（金沢大学・医学系研究科形態機能病理学）

肝に肉芽腫を認めることのある疾患は、多種類に及ぶ。しかし、いくつかの疾患を除けば、いずれも頻度の低い疾患であり、さらに各々の肉芽腫性疾患での肉芽腫の出現率も種々である。これらの理由のため、肉芽腫性疾患の存在そのものは教科書的には知られているが、日常の臨床において、肝肉芽腫はあまり気にされていないのが実態かも知れない。しかし、全ての肝生検施行例の約10%の例に肉芽腫が見られるとの報告もあり、病理学的には決して忘れてはならない病変である。また肝固有の疾患以外に、肝外の疾患、また全身性の疾患で肝に出現する二次的な病変の1つとして肝肉芽腫が知られている。頻度は低いが肝肉芽腫はルーチンの肝生検で稀ならず経験される。それぞれの症例での肝肉芽腫の病的意義が異なっているが、肝生検で見出された肉芽腫が正確な診断に結びつくことも少なくない。病理診断学的な観点からは、多くの経験と知識が要求され、当て物的な楽しみもある。肝生検で偶然に肉芽腫が発見され、PBC やサルコイドーシス、その他の稀な疾患の診断に辿りつくことがままならずある。特に、肝生検あるいは外科的切除肝で、肉芽腫に遭遇した場合、病理医としては、正確な診断に至ることのできる格好の手がかりを得たことを意味する。肉芽腫を慎重に詳細に鑑別を進めることにより、正しい診断に至ることが多いことを忘れてはならない。

本講演では、我々の従来の経験および文献的な検索を中心に、肉芽腫性肝疾患の病理学的診断プロセスを解説する。